

定期健康診断オプション検査

乳がん検診のご案内

早期発見が生涯の健康とキャリアを守るために

※2026年度の乳がん検診の日程は現在調整中です。
詳細が決まり次第、ご案内いたします。

日本女性の「9人に1人」が罹患する時代

9人に1人

生涯において乳がん罹患する確率

働き盛り世代を直撃するがん

現在、乳がんは日本人女性のがんで最も罹患数が多い疾患です
毎年約9万人が診断されています。

罹患率は30代後半から急増し、40代後半から60代前半にピークを迎えます。
これは、大学の教育・研究・事務業務において、中心的な役割を果たす年代
と完全に重なっています。

早期発見が生存率を左右する

早期発見(ステージⅠ期)
5年生存率:約99%

乳がんは早期に発見して適切な治療を行えば
極めて高い確率で治癒を目指す病気です
自覚症状がない場合で検診を受けることが、
生存率を劇的に高めます。

進行時発見(ステージⅣ期)
5年生存率:約40%

発見が遅れ、他のがん組織や離れた臓器に
転移が広がると、治療が極めて困難になります
症状が現れてからではなく定期的な検診が
命を救う選択肢です。

本学における年齢別検診オプション

対象年齢区分	検診メニュー	特長と受診の目安
49歳以下	マンモグラフィ 2方向撮影	乳腺の密度が高い年代のため、2つの異なる角度から立体的に撮影し、死角に隠れた微小な病変を捉えます。
50歳以上	マンモグラフィ 1方向撮影	加齢により乳腺が徐々に脂肪へ変化するため、1方向のみの撮影でも十分な病変の観察と正確な診断が可能です。

なぜ年齢で撮影方向数が異なるのか

高濃度乳房(デンスブレスト)対策

若年層の乳房は乳腺組織が密なため、画像上で全体が白く写ります。
多方向(2方向)から撮影して重なりを分散し、白いがん組織を識別します。

加齢に伴う乳房の脂肪化

50代以降は、乳腺が脂肪(画像上は黒く写る)へと置き換わるため、病変(白く写る)が際立ち、1方向の撮影でも正確に確認できるようになります。

不要な被曝の最小化

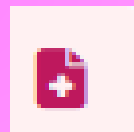
50歳以上の1方向撮影は、検診の効率性と被曝線量を抑えつつ、最大の診断効果を引き出す科学的・医学的な推奨に基づいています。

検診の必要性を裏付ける科学的根拠



国立がん研究センターがん情報サービス「院内がん登録生存率集計」

がん診断時から5年後のネットサバイバル(生存率)は、早期(1期)段階の発見であれば98.9%で、検診による早期発見が最も重要な指標として実証されています。



日本乳癌学会「乳癌診療ガイドライン」

40代～64歳女性を対象としたマンモグラフィ検診は、乳がん死亡率減少効果に確固たる学術的証拠があり、ガイドライン上「推奨グレードA」に位置付けられています。



厚生労働省「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」

科学的評価に基づいて策定されており、40歳以上の女性に対し、2年に1回のマンモグラフィ検査を必須指針として定めています。